

ナースステーションの前に大人の背丈ほどのサクラの木が飾られ、白い小さな花がたくさん咲いていた。ボランティアが近くの山から採って来たという。秋田市郊外にある外旭川病院ホスピスを見学してきた。

2階の病棟には、他の病院で「これ以上の治療はムリ」といわれたがん患者など13人がいる。痛みを取ってあげたいという医療スタッフの熱意には頭が下がる。でも、私が驚いたのはボランティアの存在感だった。

約170人が登録。いまの季節、ホール中央のテーブルにあるネコヤナギに目が行くが、実はそこかしこに生花が飾ってあった。みな病院のボランティアが生けた。毎日なにかしらの行事がある。「寅さんシリーズ」の映画上映、大正琴演奏、朗読会、お茶会、絵手紙の実習……。お坊さんの仏教法話も牧師の聖書解説も、参加自由の行事だから楽しい。

「私たちはここに、社会と季節を持ち込みたいんです」。1998年の開設以来、ボランティアコーディネーターを務める寺永守男さん(78)は言う。「社会」とはふつうの暮らしのこと。「痛み」と、その先の「死」に心を奪われていた患者たちが、行事に出て少しずつ、生活感を取り戻していく。私が見学した日は「福祉犬」がやって来た。布団に乗ったワンちゃんに見詰められ、握手し、患者たちの表情が目に見えて柔らかくなった。「うちで飼っていたシーズーはね……」。ほら、

# 「身じまい」のおと



◎若林健次

滝野隆浩  
社会部編集委員

## ホスピスで見た「5合目」の上

おしゃべりが始まった。

「痛みがたとえ取れたとしても、医療スタッフがそれで満足してもらっちゃ困る」。寺永さんはなかなか厳しい。「そこはまだ5合目。末期がんの患者さんの生活は、ここから上に登って行くこ

とが大事なんです」。多忙な医師や看護師には気が回らないことを、ボランティアが控えめに見つけ出すのだ。

一般病院では、ただベッドにうずくまって痛みに耐えるだけだった患者たち。ここではサクラを見、フキノトウの「ばっけみそ」を味わい、犬に触り、マージャンをする。ベッドに寝たままカラオケ大会に参加した患者は、昔聴いた流行歌に包まれる。そしてつぶやく。

「もうちょっと、生きてみようかな」

実は、生と死のはざまを生きるがん患者と接しながら、ボランティアたち自身が学んでいる。寺永さんはそう思っている。ほかの場所では絶対できない、命の学びである。だから、圧倒的に女性の参加者が多いことに不満がある。「オトコは何をしているのだろうか。こんないい勉強を、しかもタダでさせてもらえるのに！」

× ×

「身じまいのおと」は今回で終了します。でも、ご安心ください。今後は「くらしナビ」面(第1、3月曜掲載)で、「身じまい練習帳」として新装開店します。「のおと」が「練習帳」になっても、「身じまい」の勉強、続けます!